

「夢」と「未来」。ユビキタス社会の明日を見せる、体験させる、
近未来体験型コミュニケーション空間、パナソニックセンターとは？

近未来の暮らしが 体験できる パナソニックセンターの 試み



取材協力：松下電器産業(株)
パナソニックセンター企画運営室
企画・広報担当 北村隆主事
<http://www.panasonic-center.com/>

ケーススタディ 2

取材・文＝小原誠之

近未来のネットワーク社会 の暮らしを体験

東京・有明の国際展示場近くに建つ巨大なガラス張りの展示施設。それが、松下グループが二一世紀の事業コンセプトを提示・提案し、広く一般にも公開している総合情報発信拠点「パナソニックセンター」だ。コンセプトは、「未来体験の夢と快適をあなたの声と創りたい」。松下グループの二大テーマである「ユビキタスネットワーク社会の実現」と、「地球環境との共存」を具体的な製品・サービスにして提案する施設だ。

一階・二階は一般に公開しているフロア。一階は最新のデジタルネットワーク技術を活かした商品を、自由にみて、触って、体験できる空間で、市販されているものだけでなく、発売前の商品も展示している。二階は「地球環境との共存」の取り組みを紹介するフロア。コ・ジェネレーション・システムや廃材利用の新材料など、「くらし」と「まち」を変えていくエネルギー利用やエコロジーに関して、実際に取り組んでいる環境サービスを見せてくれる。

そして四階が、目指すビジネスマレゼンテーションのフロア。ここは



フューチャーゾーンで出迎えてくれるエージェントロボット

一般公開はしておらず、予約制でもに官公庁や企業などのビジネスマーザーに対して、松下グループが取り組んでいるビジネス関連事業の全体像・コンセプトを紹介するフロアだ。ここに、二〇一X年、社会はこうなっているであろうという想定で、近未来のユビキタス社会の暮らしを仮想体験できるフューチャーゾーンがある。現実にはまだ商品化はされていないが、新しい社会のコミニケーションスタイルとして松下電器が提案しているものだ。

「このセンターをつくったねらいは三つあります。一つは、『ユビキタス』と『地球環境』という二大テーマを、言葉だけではなく具体的な形にして提案することで、新しい未来の『夢』と『快適』をお客様とと



お父さんの書斎。
壁の全面に3面シームレスディスプレイが広がる



PDAは外出先での情報のやり取りや
情報収集のデバイスとして、
ユビキタスネットワークの中で重要な役割を果たす



お父さんが操るのは、メディアディスク。
未来のコンピュータのかたちを提案している

もに感じ、考える情報の受発信拠点をつくるため。二つ目は、松下電器は本社が大阪なので関西企業というイメージが強いのですが、今後のグローバル化、とくに海外からのお客様の利便性を考えると、大阪ではなく東京でプレゼンテーションし、情報を発信できる拠点が重要だったため。三つ目は、それらを通じて、今後の事業展開・商品開発・サービスに生かしていくためです。その結果として、お客様がより『安心・安全・快適』に暮らせる社会の創造に貢献していきたいと考えています。

とくにフューチャーゾーンでは、「e-Town」と名付けられた未来の町での新しいコミュニケーションのかたちを、ストーリー仕立てでお見せします。情報技術が成熟し、ユビキタスネットワークが実現した社会。そこでのある一家のライフスタイルを想定した家がつくられています」(パナソニックセンター広報担当、北村隆主事)

さつそく、フューチャーゾーンを案内しよう。

まず玄関には、生体認証もしくはバイオメトリクスといわれる技術が組み込まれていて、扉にはノブも鍵穴もない。指紋や瞳の虹彩で認証して電子錠を開閉し、扉を開けるセキュリティシステムである。玄関を入

ると、扉が開いたの感知して、エージェントロボットが出迎えてくれる。そして、人の声を認識して、部屋の照明を点けたり、さまざまな家電を起動・制御してくれる。エージェントロボットはまた、本人に代わってネットワーク上やシステム上で動き回ってくれる代理人的な存在でもある。家族全員のスケジュールも把握しているの、家族間のコミュニケーションもサポートする。家の中に誰もいないとき、「お母さんはどこへ行ったの?」と聞くと、ちゃんと教えてくれたりするわけだ。いずれ一家に一台、このようなロボットをもつことが可能になるだろう。そして、この「エージェント」の機能により、私たちの未来のコミュニケーションがどのように変化するかをよりわかりやすく見せてくれるのが、書斎とリビングでのデモンストレーションだ。



未来のウェアラブル・ファッションのイメージ。
情報端末と服が一体となっている

エージェントロボットによる 情報管理

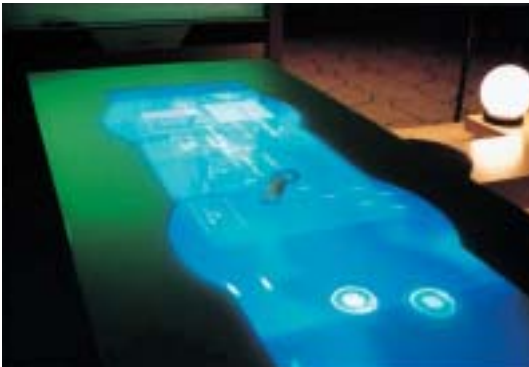
お父さんの書斎には、壁に大きく広がる三面シームレスディスプレイ、手元ですべての操作がおこなえるメディアデスクなどが置かれ、機能的なワークスペースになっている。書斎としてだけでなく、個人のオフィスの未来形としても想定されている空間だ。快適に、簡単に、誰でもコミュニケーションの取れる場になっていて、メール操作や電話、個人的な資料の閲覧などはすべて手のメディアデスクでおこなう。

これと連動しているのが、壁に埋め込まれた三面シームレスディスプレイで、両端にはまるで曇りガラスにしか見えない透明スピーカーが設置されている。なお、この透明スピーカーの技術はすでに商品化されている。メディアデスクは、面倒なキーボード操作ではなく、簡単なタッチパネル式のディスプレイ。いわゆる箱型のコンピュータではなく、コンピュータらしくない、テーブルの形のコンピュータである。

この家族の現在の状況設定として、お父さんは近々家族旅行を計画しているというシチュエーションになっている。南の島へ行くことを考



リビングにある「eテーブル」。情報フォルダは魚、エージェントはクラゲのかたちをしていて、泳ぎまわっている。見ているだけでも楽しい。



えていたお父さんは、町なかの電子広告塔から、いつも持ち歩いているPDA（携帯情報端末）に南の島の情報を取り込んできた。そのPDAには個人のIDが組み込まれていて、書斎のメディアデスクにPDAを差し込むと自動的にお父さん用の操作画面が立ち上がる。PDAからメディアデスクに取り込まれた南の島の情報は、同時に、リビングにある「eテーブル」へも送られる。家族がそろったときに、みんなでリビングのディスプレイに映し出される南の島のさまざまな情報を見ながら家族旅行の相談をするためだ。

書斎の壁のディスプレイで光っている惑星のアイコンは、メールが届いていることを教えている。もちろん、画像・音声付きのメールだ。さらに、フランス語で届いたメールもエージェントが同時通訳してくれる。そして、資料を送ってほしいというメール内容に応じて、仕事に必要な情報ファイルもエージェントが準備してくれるのだ。映し出された資料でOKなら電子ペンでメディアデスク画面の「Yes」にタッチすると、エージェントは送信もおこなう。面倒な操作をしなくてもエージェントがやってくれるわけで、なかなか便利なのか？ 有能な代理人である。

いつでも、どこでも、
誰にでも

リビングには「eテーブル」と名付けられたテーブルがあり、テーブル上には、泳ぎ回っている魚の画面が見られる。この魚アイコンの一つひとつが情報フォルダになっており、家族が座ると、その人の前に、その人に関係する情報フォルダである魚が集まってくるという楽しいシステムだ。魚のうちで光っている一つをクリックすると、さつき書斎から送った南の島のデータが開かれた。そのデータを使ってこのテーブルで家族旅行の検討をおこなうわけである。操作するのに使うのはマウスではなく、データ・キャッチャーと呼ばれるハンディなコントローラ。これで、寄ってきた魚のアイコンの上でクリックすると、情報が開かれるしくみである（これは金魚すくいのイメージだそうだ）。

テーブル上のディスプレイは、壁にあるAVウォールというパネル・スクリーンと連動していて、複数の情報を同時に見ることができる。デモンストレーションではタヒチ島の地図や観光名所などの情報、それに旅行日程などさまざまな情報が映し出された。これにより、ガイドブッ

パナソニックデジタルネットワークミュージアム [林原自然科学博物館ダイノシアファクトリー]

パナソニックセンターには、1階と3階を結ぶ構造で、松下電器と林原自然科学博物館とのアライアンスによる恐竜をテーマにした博物館もある。従来の博物館のように、パネルがあって、たくさんの説明員がいて、というものではなく、最新のデジタルネットワーク技術を駆使した博物館だ。小型の携帯情報端末(PDA)装置を携帯し、何箇所かの展示物の前に置かれたファクトスタンドという装置にかざすと、その人の位置を検知し、PDA上で恐竜などに関するさまざまな情報を閲覧できるというもの。

画期的なのは、どんどんPDAの情報が蓄積されていく点だ。帰りの出口のところで、IDとパスワードを登録すると、家に帰ってからインターネットで「ダイノシアファクトリー」のマイホームページにアクセスすることで、自分が今日見た恐竜について蓄積された情報をもう一度見ることができる。

「ここに来て楽しめると同時に、たとえば自宅に帰って、あるいは学校などで復習するときに、いつでも一人ひとりの情報を引き出して、活用できるようになっています。楽しみながら学べる施設ですね。私たちはこれも、ユビキタスネットワークの一部として考えています。未来の博物館として、パネルとか説明員、あるいは、イヤホンから一方的にガイドを聞くというのではなくて、どこにいても一人ひとりの欲しい情報が欲しい時に取り出せるシステムの実証実験と位置づけています」(パナソニックセンター企画運営室企画・広報担当 北村隆主事)

(<http://dinosaurfactory.jp/>)

上・博物館の内部には、恐竜の骨格模型や化石、発掘作業の様子など、さまざまな仕掛けがある

下2点・ファクトスタンドにPDAをかざすと情報が閲覧できる



くも不要というわけだ。

テーブル上には、魚のほかにはクラゲのようなものも四匹漂っている。

「これはシステム上のエージェントで、家族一人ひとりにそれぞれエージェントがついています。秘書のような役割を果たし、普段の生活で蓄積された家族の情報を学習しているので、家族一人ひとりの趣味や好みを把握しています。そのため、このように家族旅行の提案が出た場合、一人ひとりの好みに合わせて旅行プランをカスタマイズする。そのようなシーンを想定したシステム提案となっています」(北村隆主事)

旅行の家族会議のデモンストレーションでは四匹のエージェントが集まって会議を始めた。タヒチ島のほかにイースター島に行くプランも付け加えて検討してくれている。そして、長男にパスポートがないことをチェックし、旅行費用には交渉の余地があることを調べ上げ、報告してくれる。そこで音声で指示を与えると、長男のエージェントはパスポートの申請に、お母さんのエージェントは費用の交渉にと、画面から姿を消す。外部のネットワークを通して情報を探しに行ったわけだ。しばらくすると戻ってきて、パスポートの

電子申請手続き終了、費用の七パーセントのディスカウントに成功、などと報告する。エージェントの力を借りることで、これまでは外に出かけなくてはならなかった用事や面倒な手続きが、簡単に、居ながらにしてたちまちできてしまうのである。「このように、家の中のいたる所にエージェント機能が組み込まれているので、面倒な操作をしなくても快適に情報の受信・発信ができるようなユビキタスネットワーク社会が実現されています。パソコンのキーボードを使わないで、お年寄りから子どもまで、誰でも簡単に情報ネット

トワークを利用できるスタイルが構築されているのです」(北村隆主事)

この施設は、技術だけを見ているのではなく、将来のコミュニケーションの姿を見せようというものだ。便利でかつ新しいこういうコミュニケーションはまだ想像段階のことではあるが、いずれそういう日が到来するであろうという期待と確信を込めて提案している。

もはや決して絵空事ではないユビキタスネットワーク社会。私たちは、ここでその姿を実感したのであった。